

〔研究ノート〕

音節文字の系譜 (1)

箕原辰夫

1. はじめに

音節文字について、初めてその名前を聞く人のために、最初に若干の解説を記しておく。音を表わす文字のことを表音文字と呼ぶが、その中でも音素を直接表わす文字を音素文字 (segmental script) あるいはアルファベット (alphabet) と呼ぶ (以降、アルファベットについては「音素文字」で統一する)。音素には、子音と母音があり、子音 (consonant) は発音の最初の部分で瞬間的に発音される音であり、母音 (vowel) は子音に続く音である。どのような発音でも、音を延ばし続けると母音になる。この子音と母音を合わせて一文字として表現したのが音節文字 (syllabary) と呼ばれている。子音を C, 母音を v と表わすと、音節文字の中には、Cv という音節だけでなく、韻尾の C も含めて、CvC という音節を表わす場合や、Cvv というような二重母音、あるいは更にそれに韻尾を足して CvvC というような音節を表わすこともある。

か	क	के
k + a	k + a + n	k + a + i
子音 (C) + 母音 (v)	子音 (C) + 母音 (v) + 子音 (C)	子音 (C) + 母音 (v) + 母音 (v)
Hiragana	Hangul	Devanagari

図1 音節文字について

インド系の文字は、アブギダ (abugida, alpha-syllabary, あるいは syllabics) と呼ばれる子音の周りに母音記号を追加する文字体系になっているが、本稿ではこのアブギダについても、音の捉え方は音節を単位として捉えていることから、音節文字の範疇に入れることにする。厳密には、Wikipedia の「音節文字」⁽¹⁾の項にあるように、アブギダを子音中心の音素文字であるアブジャド (abjad, あるいは consonantary) からの派生と見做し、アルファベットと共に、音素文字として扱う場合もあるが、本稿では、広く「音節を表しうる文字がある文字体系」を音節文字として見做して、表意文字と共に音節文字を含む古代文明の文字、アブギダや準音節文字⁽²⁾ (semi-syllabary), あるいは索性文字⁽³⁾ (featural script) とも分類されるハンゲル文字も含めて扱っていく。

(1) <https://ja.wikipedia.org/wiki/音節文字>, 2019年5月閲覧

(2) <https://en.wikipedia.org/wiki/Semi-syllabary>, 2019年5月閲覧

(3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/索性文字>, 2019年5月閲覧

以下に、古代から、現代まで音節文字について、時代別に概説し、続く研究ノートにおいて、それぞれの音節文字についての解説や、議論されている論点についての考証を扱っていく予定である。

2. 音節文字概要

2.1. 古代の音節文字（紀元前）

ユーラシア大陸における音節文字の起源は古く、最初のもは、その西端のメソポタミア文明のアッカド王朝の楔形文字に遡ることができる。元々、紀元前 3200 年頃に出現した初期シュメール王朝（Sumer は本来「シュメル」あるいは「スメル」と発音するが、本稿では日本の通例に則り「シュメール」と標記する）では、楔形文字ではない絵文字（ウルク古拙文字）が使われていたのだが、それが紀元前 2500 年頃には 1,000 文字に集約され、シュメール・アッカド語を表記するためにアッカド王朝で用いられた楔形文字では 400 文字ぐらいに集約されている。その中の 60 文字程度が音節を表わすために用いられている⁽⁴⁾。

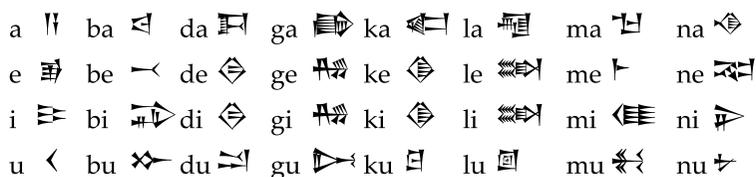


図2 アッカド朝 楔形文字の音節文字の一部

メソポタミアでは、シュメール王朝より後は、アッカド王朝も含めて、セム系の民族が王朝を形成している。セム系民族の文字標記ではエジプト聖刻文字と同様に音の標記は子音が中心であり、母音は語の先頭に立ったときなどの半母音などにしか現れてこない。楔形文字も、子音中心の発音を表すようになっていくのであるが、その後のバビロニア時代・アッシリア時代を経て、最終的にペルシアのアケメネス王朝（紀元前 559 ~ 331 年）では古代ペルシア語を表記するための古代ペルシア文字に移行し、セム系の子音中心の音素文字と音節文字の組み合わせになっている⁽⁵⁾。また、メソポタミアの影響下にあったトルコでもウガリット語を表記するためのウガリット文字（紀元前 14 世紀頃）となり、子音を中心に表わす音素文字として楔形文字が使われている。

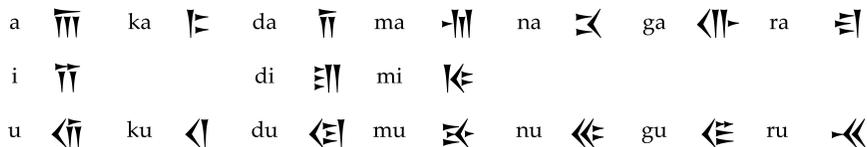


図3 古代ペルシア文字の音節文字の一部

(4) <https://en.wikipedia.org/wiki/Cuneiform#Syllabary>, 2019年5月閲覧

(5) <https://ja.wikipedia.org/wiki/古代ペルシア楔形文字>, 2019年5月閲覧

線文字 B は、紀元前 16 世紀から 13 世紀頃まで、クレタ島のクノッソスを中心に使われていた文字であり、ミュケーナイ・ギリシャ語が記述されている⁽⁶⁾。文字の種類が 80 文字以上あることから、解読の当初より音節文字として判別されていた。この線文字 B の影響を受けてか、キプロス島で紀元前 6 世紀から紀元前 3 世紀頃の碑文において、ギリシャ語を標記するために使われたキュプロス音節文字⁽⁷⁾があり、この文字の構成や形は、線文字 B と似ている。後継のキュプロス音節文字も紀元前 3 世紀以降は、使われておらず、ギリシャの音素文字に集約されていったのではないかと考えられる。

a	𐀀	da	𐀁	ka	𐀂	ma	𐀃	na	𐀄	pa	𐀅	ra	𐀆
e	𐀇	de	𐀈	ke	𐀉	me	𐀊	ne	𐀋	pe	𐀌	re	𐀍
i	𐀎	di	𐀏	ki	𐀐	mi	𐀑	ni	𐀒	pi	𐀓	ri	𐀔
o	𐀕	do	𐀖	ko	𐀗	mo	𐀘	no	𐀙	po	𐀚	ro	𐀛
u	𐀜	du	𐀝	ku	𐀞	mu	𐀟	nu	𐀠	pu	𐀡	ru	𐀢

図 4 線文字 B の音節文字の一部

イベリア半音節文字は、古スペイン語を表記するために、紀元前 5 世紀あるいは紀元前 7 世紀から、紀元前 1 世紀あるいは紀元後 1 世紀まで用いられた⁽⁸⁾。その祖は、フェニキア文字あるいはギリシャ文字と言われているが、特定の子音 (/g/, /k/, /b/, /d/, /t/) に対しては、それぞれの母音に対して字形が異なる音節文字になっており、それ以外の子音に対しては、子音と母音を別々に記述する音素文字になっている。イベリア半音節文字には、いくつかのバリエーションがあり、タルトゥス (Tartessian) 語・ルシタニア (Lusitanian) 語で用いられた南西古スペイン文字⁽⁹⁾、イベリア (Iberian) 語で用いられた南東イベリア文字⁽¹⁰⁾・北東イベリア文字⁽¹¹⁾、およびケルティベリア (Celtiberian) 語で用いられたケルティベリア文字⁽¹²⁾がある。

a	𐀀	ga/ka	𐀁	ba	𐀂	da/ta	𐀃
e	𐀄	ge/ke	𐀅	be	𐀆	de/te	𐀇
i	𐀈	gi/ki	𐀉	bi	𐀊	di/ti	𐀋
o	𐀌	go/ko	𐀍	bo	𐀎	do/to	𐀏
u	𐀑	gu/ku	𐀒	bu	𐀓	du/tu	𐀔

図 5 北東イベリア音節文字の一部

(6) ルイ＝ジャン・カルヴェ、『文字の世界史』、pp. 221-227、1998 年、河出書房新社

(7) <https://ja.wikipedia.org/wiki/キュプロス文字>、2019 年 5 月閲覧

(8) https://en.wikipedia.org/wiki/Semi-syllabary#Iberian_semi-syllabaries、2019 年 5 月閲覧

(9) https://en.wikipedia.org/wiki/Southwest_Paleohispanic_script、2019 年 5 月閲覧

(10) https://en.wikipedia.org/wiki/Southeastern_Iberian_script、2019 年 5 月閲覧

(11) https://en.wikipedia.org/wiki/Northeastern_Iberian_script、2019 年 5 月閲覧

(12) https://en.wikipedia.org/wiki/Celtiberian_script

楔形文字以降、インドではアブギダと呼ばれる子音の周りに母音記号を追加する文字体系が現れてきている。前節でも述べたように、本稿ではこのアブギダについても、音の捉え方は音節を単位として捉えていることから、音節文字の範疇に入れることにする。北インドでは、カローシュティー文字が紀元前4世紀から紀元3世紀頃まで、またそれよりも南のインドではブラフミー文字が紀元前6世紀から使われ始めた。共に、プラークリット（中期インド・アーリア語）の早期の言語を表記するために使われた。ブラフミー文字については、その派生系が東南アジアまで広がり、一連のインド系文字の興隆を招いた。各文字については、今回の概説においては言及しないが、アブギダを取り扱う回において、詳細を扱う。アラム文字からカローシュティー文字やブラフミー文字が形成されたという学説がある⁽¹³⁾が、字形から考えれば、ブラフミー文字はフェニキア文字に近く、メソポタミアを中心とした海の交易のなから、フェニキアとの交易の中からブラフミー文字が形成されたことをその回で考証していく。

a	𑀀	ka	𑀁	kha	𑀂	ga	𑀃	gha	𑀄	da	𑀅	dha	𑀆
ā	𑀇	kā	𑀈	khā	𑀉	gā	𑀊	ghā	𑀋	dā	𑀌	dhā	𑀍
i	𑀎	ki	𑀏	khi	𑀐	gi	𑀑	ghi	𑀒	di	𑀓	dhi	𑀔
ī	𑀕	kī	𑀖	khī	𑀗	gī	𑀘	ghī	𑀙	dī	𑀚	dhī	𑀛
u	𑀜	ku	𑀝	khu	𑀞	gu	𑀟	ghu	𑀠	du	𑀡	dhu	𑀢
ū	𑀣	kū	𑀤	khū	𑀥	gū	𑀦	ghū	𑀧	dū	𑀨	dhū	𑀩

図6 ブラフミー文字の一部

一方、漢字についても、その初期の過程において作成された象形文字として分類される漢字の1文字が1音節・1義を示す構造になっていたことを考えれば、音節文字として捉えることも可能である⁽¹⁴⁾。漢字が成立したと考えられる紀元前14世紀頃の殷あるいは紀元前11世紀頃の周などの金文として描かれた漢字では、1つの字が1音節から、韻尾や2音節までの音を含まれていることが研究されている。また、意味よりも音に比重が置かれて作られた漢字もある。字義の有無を問わず、1音節を表しうる文字という点において音節文字としての範疇に入れるべきという立場を本稿では取る。漢字から派生して作られた日本の仮名などの音節文字は、元々漢字の性質の中に音節文字を表現する機能があったからこそ、生まれたのではないだろうか。

最後に、ユーラシア大陸から遠く離れて、中央アメリカにおいては、マヤ文字が音節文字で表わす標記体系を持っている⁽¹⁵⁾。マヤ文字は、文字要素を組み合わせることで1つの文字を作るため、1つの文字が1つの文を表わすこともあるが、その造形手法の中にいくつかの音節文字を組み合わせることで、1つの言葉を表わす方法がある。このときに使われる文字要素は、それぞれ1音節を表わしている。マヤ文字は、紀元前3世紀頃から6世紀頃まで使われていたようであるので、アブギダの成立時期と重なっていて興味深い。

(13) https://en.wikipedia.org/wiki/Brahmi_script, 2019年5月閲覧

(14) <https://ja.wikipedia.org/wiki/漢字>, 2019年5月閲覧

(15) https://en.wikipedia.org/wiki/Maya_script, 2019年5月閲覧



図7 マヤの音節文字の一部

2.2. 古代（紀元後10世紀まで）に生まれた音節文字

エチオピアで用いられているゲエズ文字（アムハラ文字，エチオピア文字とも呼ばれる）は，紀元前5世紀頃に成立した文字であるが，初期はゲエズ語を表わしていたが，その後，アムハラ語，ティグリニャ語，ティグレ語，ハラリ語，プリン語，メエン語，およびオロモ語（現在では使われてない）など，東アフリカで用いられている言語の表記のために現在まで用いられている⁽¹⁶⁾。ゲエズ文字の祖とされるのは，古代南アラビア文字であり，セム系で子音中心のアブジャドとしての成立なのであるが，3～4世紀からアブギダとして使われ始めた⁽¹⁷⁾。それ以降，現在までアブギダとして使用されているので，ここに分類した。子音記号に母音マーク（ダイアクリティカル・マーク：diacritical mark）がつけられるようになったためである。字の一部には，インド系のタミル文字と同様に，母音と子音の組合せ次第で字形そのものが変化する場合もある。

ä 0	hä U	lä Λ	mä 𐌺	rä 𐌺
u 0	hu U	lu 𐌺	mu 𐌺	ru 𐌺
i 𐌺	hi 𐌺	li 𐌺	mi 𐌺	ri 𐌺
a 𐌺	ha 𐌺	la 𐌺	ma 𐌺	ra 𐌺
e 𐌺	he 𐌺	le 𐌺	me 𐌺	re 𐌺
ə 0	hə U	lə Δ	mə 𐌺	rə 𐌺
o 𐌺	ho U	lo 𐌺	mo 𐌺	ro 𐌺

図8 ゲエズ文字の音節表現の一部

漢字の派生系という流れにおいて，ユーラシア大陸の東端の日本において，日本語の音節を表記するために，7～8世紀頃において漢字の借字である萬葉仮名を経て，純粋な音節文字である仮名（以降片仮名と平仮名を併せて「かな」と表記する）が成立している。片仮名については，漢文を和読するための万葉仮名の一部を省略した振り仮名としての出発だったとされている。また，平仮名については，借字の萬葉仮名の草書体（「草」と呼ばれる）が独立したものとされている。ただし，「かな」については，明治以降に明治政府によって，文字種が制限されて，長音・拗音・濁音・促音などの標記が統一化された。江戸時代までは流通しており，その制限外になってしまった「かな」文字は，「変体仮名」として扱われるようになってしまった。そのような意味においては，現在流通している「か

(16) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ゲエズ文字>, 2019年5月閲覧

(17) <https://ja.wikipedia.org/wiki/アブギダ>, 2019年5月閲覧

な」は、近代になってから整備された音節文字としても捉えることができる。

また、「かな」が作られるより前の6世紀以前に古代日本語を表記するために作られたとされる、いくつかの神代文字が発見されているが、たとえば阿比留文字も「かな」と同様の音節を表わす文字であり、ハングル文字との類似性を指摘されていることから、後世(18世紀頃)につくられた偽作という主張には一定の根拠があるように思える。対馬文字など他の文字も、音節文字の範疇を超えておらず、「かな」の基本があった上での、暗号のように作られた後世の偽作としての音節文字であるという見解が一般になされている⁽¹⁸⁾。

契丹文字は、10世紀から12世紀まで、漢字の影響下において、中国北方およびモンゴルで契丹語を表記するために用いられていた文字であるが、遼の太祖耶律阿保機が制定したとされる表意文字(契丹大字)と、太祖の弟であった耶律迭剌が制定したとされる表音文字(契丹小字)の2種類の文字が存在する⁽¹⁹⁾。この契丹小字の方は、十分な解読がされていないものの、音節文字になっている⁽²⁰⁾⁽²¹⁾。

a	𐰇	ai	𐰇𐰏	ca	𐰇𐰏	da	久	ta	𐰇
e	𐰇	au	𐰇𐰏	cau	𐰇𐰏	d,de	𐰇	t,te	𐰇
i	𐰇	ia	𐰇𐰏	c,ci	𐰇				
o	𐰇	oi	𐰇𐰏	co	𐰇𐰏	dau	𐰇	tau	𐰇
u	𐰇	ui	𐰇𐰏	cu	𐰇𐰏	du	𐰇	tu	𐰇

図9 契丹小字の音節表現の一部

2.3. 中世・近世(11世紀～18世紀)に生まれた音節文字

中世においては、漢字の影響下において、朝鮮半島で15世紀に李氏朝鮮王朝において、第4代国王の世宗が「訓民正音」として公布した、朝鮮語の音節を表記するためのハングル文字が生み出されている⁽²²⁾。ハングル文字は、モンゴル語を表記するためにチベットで生まれた、アブギダの1つであるパスパ文字の影響があるという説も出されている⁽²³⁾。

a	아	k/ga	카	na	나	t/da	타	ra	라	ma	마
ya	야	k/gya	카	nya	냐	t/dya	타	rya	랴	mya	먀
o	오	k/go	코	no	노	t/do	고	ro	로	mo	모
yo	요	k/gyo	코	nyo	뇨	t/dyo	토	ryo	료	myo	묘
u	우	k/gu	구	nu	누	t/du	투	ru	루	mu	무
yu	유	k/gyu	구	nyu	뉴	t/dyu	투	ryu	류	myu	묘
i	이	k/gi	기	ni	니	t/di	티	ri	리	mi	미
e	에	k/ge	게	ne	네	t/de	테	re	레	me	메

図10 ハングル文字の音節表現の一部

(18) <https://ja.wikipedia.org/wiki/神代文字>, 2019年5月閲覧

(19) <https://ja.wikipedia.org/wiki/契丹文字>, 2019年5月閲覧

(20) https://en.wikipedia.org/wiki/Khitans_small_script, 2019年5月閲覧

(21) Kane, Daniel, "The Kitan Language and Script," Brill, 2009, ISBN 978-90-04-16829-9

(22) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ハングル>, 2019年5月閲覧

(23) <https://ja.wikipedia.org/wiki/パスパ文字>, 2019年5月閲覧

中国内部においては、中国南部に住む少数民族の彝族が彝文字（ロロ文字）と呼ばれる表意文字を15世紀に形成した。当初は、漢字と同様の単音節の表語文字であったが、彝語を表記するための音節文字として中国政府によって1974年に涼山規範彝文として制定された⁽²⁴⁾。44の音節頭子音（声母）・10の母音（韻母）・4つの声調があるので、1760字が必要であるが、使われない組み合わせがあることと、中昇調を記号で表すため、Unicodeでは1165文字が登録されている。

i /ī/	𑉑	bi	𑉒	pi	𑉓	mi	𑉔	ni	𑉕
ie /ĕ/	𑉖	bie	𑉗	pie	𑉘	mie	𑉙	nie	𑉚
a /ā/	𑉛	ba	𑉜	pa	𑉝	ma	𑉞	na	𑉟
uo /5/	𑉠	buo	𑉡	puo	𑉢	muo	𑉣	nuo	𑉤
o /ō/	𑉥	bo	𑉦	po	𑉧	mo	𑉨	no	𑉩
u /ū/		bu	𑉫	pu	𑉬	mu	𑉭	nu	𑉮

図11 涼山規範彝文の音節文字の一部

同じように、チベット東部と中国南部に住む少数民族のナシ族のトンパ文字（東巴文：Dongba）⁽²⁵⁾は、教典を記述するために11世紀ににおいて表意文字として成立したが、ナシ族は、このトンパ文字と共に使われるゴバ文字（哥巴文：Geba）⁽²⁶⁾と呼ばれるナシ語を表記するための音節文字も持っている。各音節は、仮名と同様に単体の1つの文字で表わされ、500文字程度ある。トンパ文字とゴバ文字の成立時期の前後については議論がある。彝文字もゴバ文字も、現在まで用いられている点に関しては、音節文字の系譜の中で重要な位置を占めている。

i	𑄎	pi	𑄏	bi	𑄐	mi	𑄑	di	𑄒				
y	𑄓	py	𑄔	by	𑄕			dy	𑄖				
		pe	𑄗	be	𑄘	me	𑄙	de	𑄚	ne	𑄛		
a	𑄜	pa	𑄝	ba	𑄞	ma	𑄟	da	𑄠	na	𑄡	ka	𑄢
o	𑄣	po	𑄤					do	𑄦	no	𑄧	ko	𑄨
u	𑄩	pu	𑄪	bu	𑄫	mu	𑄬	du	𑄭			ku	𑄮

図12 ゴバ文字の一部

明の時代に生まれたという伝承を持つ女書⁽²⁷⁾は、主に湖北省の女性によって使われてきた。江永県地域の土語を表記するために用いられてきた。女書の起源がいつだったかについてはよく分かっていない。漢字を単純化していることから、漢字が普及した後に作ら

(24) <https://ja.wikipedia.org/wiki/彝文字>, 2019年5月閲覧

(25) <https://ja.wikipedia.org/wiki/トンパ文字>, 2019年5月閲覧

(26) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ゴバ文字>, 2019年5月閲覧

(27) <https://ja.wikipedia.org/wiki/女書>, 2019年5月閲覧

れたということは推定されるが、宋・元の時代から用いられているとも考えられている⁽²⁸⁾。また、最盛期は清の時代であったとされている。現在まで少数の女性によって使われてきており、湖北省には「中国女書村」も開設された。1音節を表わす600から700文字があるが、Unicodeには、そのうち396文字が字形として制定されている。

i5) na33 } ma5 { ie21 | u5 (cya35)| thu35 }/

図13 女書の一部

2.4. 近代(19世紀)に生まれた音節文字

近代以降は、日本語の仮名文字なども含めて、元々使われてきた文字について政府が標準化する動きが出てくる。加えて、文字を考案した人物が特定できる場合が多くなってくる。近代以降に文字が標準化あるいは新たに考案されるのは、その土地で伝わってきた口承言語を文字として書き記そうという機運、あるいは西欧のアルファベットに対抗しようという勢力から起こったものであると考えられている。特に、西欧が植民地化した地域において、このような動きが顕著に現れており、それが音素文字ではなく、音節文字としての制定に繋がっている。

チェロキー文字は、1810年代から1820年代に掛けて、インディアンの銀細工師のシクウォイアがチェロキー語を記述するために作ったもので、85文字の音節文字から構成される⁽²⁹⁾。音素文字であるローマ字と似ている、または全く同じ字形をしているものもあるが、音韻はすべて音節文字になっている。また、チェロキー文字がリベリアのヴァイ文字に影響を与えたということが、移住者がいたことによって明らかになった。

a	D	ga	ᄁ	ha	ᄂ	ma	ᄃ	na	ᄄ	da	ᄅ
e	R	ge	ᄆ	he	ᄇ	me	ᄈ	ne	ᄉ	de	ᄊ
i	T	gi	ᄋ	hi	ᄌ	mi	ᄍ	ni	ᄎ	di	ᄏ
o	ᄐ	go	A	ho	ᄑ	mo	ᄒ	no	Z	do	V
u	ᄓ	gu	J	hu	ᄔ	mu	ᄕ	nu	ᄖ	du	S

図14 チェロキー文字の一部

ヴァイ文字は、西アフリカにあるリベリアのヴァイ語を表記するために、1833年ごろにモモル・ドゥワル・ブケレによって考案された⁽³⁰⁾。1899年と1962年に標準化され、200余りの音節文字が存在するが、実際に使われているのは40字から60字程度とされている。

(28) <https://en.wikipedia.org/wiki/Nüshu>, 2019年5月閲覧

(29) <https://ja.wikipedia.org/wiki/チェロキー文字>, 2019年5月閲覧

(30) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ヴァイ文字>, 2019年5月閲覧

e	ᵉ	he	ᵆ	pe	ᵆ	be	ᵆ	ke	ᵆ	me	ᵆ	ne	ᵆ
i	ᵇ	hi	ᵇ	pi	ᵇ	bi	ᵇ	ki	ᵇ	mi	ᵇ	ni	ᵇ
a	ᵃ	ha	ᵃ	pa	ᵃ	ba	ᵃ	ka	ᵃ	ma	ᵃ	na	ᵃ
o	ᵇ	ho	ᵇ	po	ᵇ	bo	ᵇ	ko	ᵇ	mo	ᵇ	no	ᵇ
u	ᵇ	hu	ᵇ	pu	ᵇ	bu	ᵇ	ku	ᵇ	mu	ᵇ	nu	ᵇ
ɔ	ᵇ	hɔ	ᵇ	pɔ	ᵇ	bɔ	ᵇ	kɔ	ᵇ	mɔ	ᵇ	nɔ	ᵇ
ɜ	ᵇ	hɜ	ᵇ	pɜ	ᵇ	bɜ	ᵇ	kɜ	ᵇ	mɜ	ᵇ	nɜ	ᵇ

図 15 ヴァイ文字の一部

2.5. 20 世紀に考案された音節文字

西アフリカの音節文字は、ほぼ 20 世紀に政府によって作られたか、それ以前の考案に対して標準化されたものになっている。近代の項でも述べたように、西欧諸国のアルファベットに対抗する目的でも作られているので、音節文字であることが多い。例外は、ギニアのマンデ語の表記に使われるンコ文字（マネンカ文字）と呼ばれる音素文字や、セネガルで作られたウォロフ文字と呼ばれるアラビア文字を基本とした音素文字、あるいはリベリアのバサ語の表記に用いられる音素文字であるバサ文字、およびナイジェリアのオベリ・オカイメ教会で使われるメデファイドリン語の表記に使われる音素文字（メデファイドリン文字と呼ばれる）などである。ただし、ンコ文字も、母音文字が子音文字と 1 記号として組み合わせられる形ではあるので、それを考えるとアブジャド寄りの音節文字として捉えることができる。しかしながら、20 世紀に考案された音節文字は、ほぼすべてが普及せず、結局使用者がほとんどいなくなってしまう。これは、ローマ字（ラテン文字）によって、それぞれの言語の正書法が確立されたことによる。

カメルーンのバムン文字⁽³¹⁾は、バムン人のバムン語を表記するために作られた音節文字で、20 世紀初頭にバムン王国のスルターンであったンジョーヤが考案した。初期は絵文字であったが、その後第 6 版（1910 年制定）において音節文字に変化した、この音節文字はその先頭の 4 文字を取って「アカウク」とも呼ばれている⁽³²⁾。現代（第 7 版）では、80 文字が各音節を表わすために用いられている。Unicode では 88 文字が規定されている。宮廷内で使われていたが、1930 年代に使用されなくなってしまった。

マリの一部族バンバラ・マサシの使うマサバ文字（バンバラ文字）は、1930 年頃ウヨ・クルバイが考案したものとされている⁽³³⁾。マンデ語派のバンバラ語を記すための文字の一つであるが、母音 7 音と子音 20 音の組合せに対して、字形がまったく異なる（規則性がない）文字が割り当てられている。ただし、いくつかの組合せが欠落しているので、計 125 文字ほどの音節文字がある。1967 年以降、バンバラ語はローマ字によって記述されるようになってしまった⁽³⁴⁾ため、現在ではほとんど使われていない。

シエラレオネのメンデ文字⁽³⁵⁾は、メンデ語を表記するために、1917 年にイスラム学者

(31) <https://ja.wikipedia.org/wiki/バムン文字>, 2019 年 5 月閲覧

(32) https://en.wikipedia.org/wiki/Bamum_script, 2019 年 5 月閲覧

(33) ルイ＝ジャン・カルヴェ, 『文字の世界史』, pp. 196-199, 1998 年, 河出書房新社

(34) https://en.wikipedia.org/wiki/Bambara_language, 2019 年 5 月閲覧

のモハメド・トゥレによって考案された音節文字だが、当初42文字しかなかったが、その弟子であり、義理の子であるキシミ・カマラによって、不足する音節文字が150ほど追加された。最初の3文字から「キカクイ」とも呼ばれる。Unicode 7.0からは、音節文字197文字が規定されている。ローマ字でのメンデ語の正書法が確立されたため、現在は、数百人程度の使用者しかない。

クペレ文字⁽³⁶⁾は、リベリアのクペレ語を表記するために、1930年代にリベリアのボン群のサノイエアの首長グビリによって考案された音節文字である。この文字では、子音の無声と有声の違いなどを無視して同じ字を使うため、90文字程度になっているが、後で濁点記号や、声調記号、長母音記号などが追加された。クペレ文字はクペレ族のうち、グビリの住んでいた土地とその周辺にしか普及せず、現在のクペレ語はローマ字によって記述されている。

ロマ文字⁽³⁷⁾は、リベリアのマンデ語派のロマ語を表記するために、ウィド・ゾボが1930年代に考案した音節文字である。1930年代から1940年代で使われたが、普及せず、現在はローマ字がロマ語の表記に用いられている。185文字を研究者が指摘したが、現在の使用者が用いているものとは異なっている。

アフファカ文字⁽³⁸⁾は、ジュカ音節文字とも呼ばれるが、オランダ領ギアナ（現在のスリナム）でジュカ語を表記するためにアフファカ・アトゥミシによって1910年頃に考案された音節文字だが、1音節を表わす56の字形を持つ。これも現在の使用者は、20人程度になっており、ジュカ語の表記には通常ローマ字が用いられている。

アラスカ文字⁽³⁹⁾は、20世紀初頭に南西アラスカのユピック（先住民民族）であるヘルパー・ネックによって、中央アラスカ・ユピック語を表記するために考案された音節文字だが、普及しなかった。64の音節文字と閉音節を表す10文字から構成される。エスキモーの膠着語を表現するには、音節文字の方が、都合が良かったので考案されたと思われる。現在は、ユピック語の表記には1920年代に正書法が確立されたローマ字が用いられている。

ウォレアイ文字⁽⁴⁰⁾は、カロリン諸島文字とも呼ばれ、ミクロネシアのカロリン諸島で用いられていた音節文字である。タイプ1とタイプ2があり、タイプ1に対して少し整備されたタイプ2は、1907年以降にファラウレップにおいて考案されたとされているが、1950年代で使用者がほぼいなくなっている。タイプ2の音節文字として、Unicodeでは97文字が提案されているが、部分的なものになっている。

3. おわりに

このように音節文字を概観してみると、エジプト聖刻文字から始まる音素文字(アルファ

(35) <https://ja.wikipedia.org/wiki/メンデ文字>, 2019年5月閲覧

(36) <https://ja.wikipedia.org/wiki/クペレ文字>, 2019年5月閲覧

(37) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ロマ文字>, 2019年5月閲覧

(38) <https://ja.wikipedia.org/wiki/アフファカ文字>, 2019年5月閲覧

(39) <https://ja.wikipedia.org/wiki/アラスカ文字>, 2019年5月閲覧

(40) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ウォレアイ文字>, 2019年5月閲覧

ベット)・アブジャドに対して、音節文字の系譜は一定の勢力を有しているように思える。特に、アジアの南から、東に掛けては、音韻を音節で捉えて文字にすることが一般的に行なわれていたことが窺える。また、近代以降も、音節で文字を制定あるいは考案する場合が、アジアだけではなく、西アフリカなどにもある。そのような状況を鑑みれば、音節文字の普遍性については注目されるべきであろう。これから始まる一連の研究ノートにおいては、古代の文字から順に、それぞれの音節文字の詳細を紹介していく。また、その中で、専門家の間で議論されている論点の考証なども含めていく。また、今回の概要では、ルイ＝ジャン・カルヴェの『文字の世界史』⁽⁴¹⁾やスティーヴン・ロジャー・フィッシャーの『文字の歴史』⁽⁴²⁾などを底本にし、主に Wikipedia の関連項目を参考文献に挙げているが、それぞれの回においては、研究者の論文や著書などの資料についても、参考文献として挙げていく。

(2019.6.3 受稿, 2019.7.16 受理)

(41) ルイ＝ジャン・カルヴェ, 『文字の世界史』, 1998年, 河出書房新社

(42) スティーヴン・ロジャー・フィッシャー, 『文字の歴史』, 2005年, 研究社

〔抄 録〕

この研究ノートでは、古代から現代までの音節文字について、時代別に概説し、続く研究ノートにおいて、それぞれの音節文字についての解説や、議論されている論点についての考証を扱っていく。